

陳舜臣さんを語る会通信

NO.143 Oct. 2025

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2025年10月15日

『小説現代』から いきなり全集へ『謀略 文禄・慶長の役』

『謀略 文禄・慶長の役』は、初出の『小説現代』（講談社）1970年5月号から、文庫本などに収録されたりすることなく、『陳舜臣全集9』（講談社）にだけ収められている稀有な短編です。そんなことで、私（橘）は、つい最近まで、この作品の存在を知らずにきました。



■文禄・慶長の役（ぶ
んろく・けいちようの
えき）は、天正20年
（1592年）に始まって
翌文禄2年（1593年）
に休戦した文禄の役と、
慶長2年（1597年）の
講和交渉決裂によって
再開されて慶長3年
（1598年）の太閤豊臣
秀吉の死をもって日本
軍の撤退で終結した慶
長の役とを合わせた戦
役の総称です。
この文禄の役と慶長
の役との間に講和交渉

『謀略 文禄・慶長の役』が掲載された
『小説現代』（1970年5月号 講談社）
の表紙と目次



がに入る。交渉の明側の中心人物が
沈惟敬で、前後二回来日している。
しかし、『謀略 文禄・慶長の役』は
あくまで小説、フィクションです。

主たる登場人物

●陳澹如（ちんたんじょ） 蘇州の年
増芸妓。小金を貯めている。

●沈惟敬（しんいけい） 実在の人物。
十六世紀末の人。浙江の人とも、福建
出身とも言われるが定かでない。父親
は商人？海賊の一味だったかもしれない。
沈は父の形見だった日本刀に惹かれ
魅せられ、このことが彼の人生に大
きく影響する。彼は日本刀蒐集の資金
を得るため陳澹如を籠絡した。芸妓を
籠絡できるほどの美男子ではない。朝
鮮側の記録によると、「其ノ人貌寝
（カタチミニク）シ」とある。そんな
彼が陳澹如を情婦にできたのは、その
弁舌にあった。

沈は日本刀蒐集に留まらず、日本刀
を生んだ国のことを知りたいと思うよ
うになった。そんな時、鄭四に出会う。
鄭四に根掘り葉掘り質問、メモを取
り、日本の地図さえ作成するという熱
の入れようで、やがて、日本六十六州
の国名を倭語（日本語）読みで諳んじ
てしまった。彼の「日本語」は政治、
交通、物産、商工業にまで及ぶよう
になった。

●鄭四（ていし） 倭寇にさらわれ、
博多の商人に奴隷として売られる。主
人の友として日本各地を旅行。のち、
主家を脱走し十年ぶりに帰国。日本語
が話せる。

『謀略 文禄・慶長の役』(続)

右の画像二枚は kamurai.itspy.com より



『謀略 文禄・慶長の役』

冒頭、重光葵の回顧録の記述、

——大東亜戦争末期の繆斌は、秀吉の朝鮮征伐末期の陳惟敬と好一對の人物である。

(重光葵『昭和の動乱』)

で、始まる。

陳舜臣さんは、この記述のすぐ後、

重光の記憶違いで、惟敬の姓は陳ではなく、沈であった。

と、訂正している。

文禄の役始まる

豊臣秀吉が、「仮道入明」(道をかりて、明に入る)と豪語し、朝鮮に攻め込んだのは一五九二年のことであった。

中国明朝の対応

当時、明帝は神宗で、兵部尚書(国防相)は石星であった。日本軍が朝鮮を攻め、朝鮮は宗主国である明に救援を求めた。そのとき、石星は神宗に「死間」の使用を献策し許可される。

死間■「間」とは、間諜などの用例のように、

謀略、諜報のこと、またその要員をいうが、「死間」とは、本人には知らされないが、はじめから死地に置かれるスパイのことである。

このような情勢のなか、明廷は「日本通」

を求めた。

沈惟敬は、陳澹如に勧められ、都へ上る気になる。

沈惟敬は、家人と称して鄭四を伴い応募し採用される。表向き、遊軍將軍という官職を与えられたが、実際は「死間」であった。

沈惟敬は宿舎に帰って陳澹如に言った。

「いつものおれだと思おうか？おれに変わったところはないか？」

「ただの游撃將軍さまじゃないんだぞ」

「じゃ、なになの？」

「男の仕事は女に話せない」

(おかしいわ、この人。そういうえば、どこか変わったみたい。…)

男の体内に、なにか魔法の力が注ぎこまれたようだった。

(自信というものかしら？)

澹如はそんな推測をした。自信にしても、尋常なそれではない。——彼女は一抹の不安をおぼえた。

「お仕事には、くれぐれも気をつけてね」

彼女は出世の機会だと言って、惟敬に上京をすすめたことを、半ば後悔しはじめていた。

中国明朝の対応 混乱・錯綜する

廟議は、日本軍を撃滅すること、「主戦」と決していたが、日本軍が意外に強いとわかり、「主和論(和平論)」が台頭、作戦は混乱・錯綜する。

混乱・錯綜の責任をとらされて兵部尚書(国防相)石星は獄に繋がれることに。

そして、陳澹如の不安は的中、沈惟敬の身にも…。

以下略。『陳舜臣全集9』(講談社)でお読み下さい。

陳舜臣さんにとって「幻想の田舎」 生田神社



『神戸っ子』創刊(1961年3月)号 表紙

月刊『神戸っ子』(1961年3月号)
「『神戸っ子』と私の三十年。」
(小見出し及び傍線は加筆)

神戸では生田さんが一種の暦

『神戸っ子』は創刊三十周年を迎えたという。これは私が江戸川乱歩賞をいただいて、プロの作家として歩んできたのとおなじ年輪というわけだ。『神戸っ子』では、それが三月号にあたるそう。私のプロ入り三十周年は、それではいつになるのだろうか？ 昭和三十六年十月に授賞式があったが、授賞の通知は、八月四日のことだった。忘れもしない生田神社の夏祭のときで、夕方、店から家に帰る途中、カバンの手提げの部分がはずれてしまった。

——もうサラリーマン生活はやめてよ
——ということかな？

と思いつながら北野町の坂を登って行く、妻が坂の上で手を振っていた。授賞のしらせがあったと、さすがにすくなくらず興奮していた。じつは七月のはじめに、最終選考の五篇にはいったので、略歴を知らせよ、という連絡があったので、心待ちにしていたのである。

受賞作『枯草の根』は、四月半ばに脱稿した。五百枚の原稿を投函しに行ったのは、生田神社の春祭の日のことで、生田さんとは縁が深い。というよりは、神戸では生田さんが一種の暦になっているのだろう。

作家生活三十周年を祝うとすれば、脱稿投函の生田さん春祭か、受賞決定の夏祭、授賞式の秋祭か、そのいずれかということになる。

生田神社社報『むすび』

昭和40年9月20日号及び

昭和43年8月3日号より

(傍線は加筆)

「幻想の田舎」生田さん

こどものころ生田さんの境内でよく遊んだ。池があったし森もあった、たのしかった。もっとも森のほうは柵で囲まれていて、なかにはいることはできなかったが、そこに森があるというだけで、けっこううれしかった。柵のすきまから、なかをのぞくと子供心になんとなくロマンチックな気分を味わうことができた。私の故郷は遠い台湾だから、そうかんたんに田舎へ帰るわけにはいかない。…

だから、休暇で田舎へ行く友達が羨ましくてならなかった。

そんなとき私は生田さんへ一人行くのだ。はじめはひとりぼっちで淋しいが、そのうちにだんだんと「幻想の田舎」が生田さんのなかに組み立てられる。私はそこで自分の田舎になぞらえる。

昭和20年の6月5日、神戸に大空襲があった。私は垂水に疎開していたが、B29が退去してしばらくしてから神戸へ出た。…あの時の神戸は瓦礫の焦土となっていた。生田神社に入った。ふと森のことを思い出して、かけつけた。森のなかにも焼夷弾はおちていたらしいが、どうやら致命的ではないようだった。私はじつと見つめているうちに「大丈夫、生田の森は息をふきかえす！」と思った。すると、うなだれていた心もシャンとなって元気が湧いてきた。

昭和36年8月4日の夕方、貿易商社員だった私は、帰宅の途中、生田さんに寄った。丁度夏祭りの最中である。献灯などを見て遅くなり、くたびれた鞆をさげて家に向ったが、鞆のところが切れてしまった。鞆を小脇にかかえて北野町の坂をのぼって行くと妻が待っていて、私をみると興奮したように手を振った。——東京から電話があつて、江戸川乱歩賞受賞を知らせてきた——ということだった。

鞆のところが切れたのは、「もう職業を変えよ」という神の暗示だったかもしれない。



春祭「曲水の宴」
(生田神社
ホームページより)

陳舜臣さんと宝塚歌劇の縁

一九九四年八月十日、
宝塚歌劇場で講演中に倒れる

陳舜臣さんは宝塚歌劇八十周年記念行事の講演中に同劇場の舞台で脳出血で倒れ入院。一時は全く意識不明の状態が続いた。

■陳舜臣さんが宝塚歌劇八十周年の節目に講演をするという関係・縁を物語るエッセイを紹介致します。

タカラヅカと陳さん 宮田達夫
講談社『陳舜臣全集6』付録「月報6」

陳さんが、宝塚歌劇とご縁が出来たのは、鳳蘭のサヨナラ公演「白夜・わが愛」の舞台だった。

この時、私はテレビドキュメント「私は結婚したい―鳳蘭―」という番組を制作しており、陳さんにも鳳蘭についてのインタビューを観劇後、宝塚の花の道でお願いした。

その時、陳さんは、鳳蘭に対して「『君子豹変』^{くんしひょうへん}という言葉があり、日本人は悪い意味にとるけど、本当は毛が抜け変わるたびに大きく成長していく事なのです。彼女にはそうした表現がぴったりだと思いますネ。大きく育って欲しいですネ」と語った。

鳳蘭に期待する陳さんの暖い心情が、その一言から強く感じられた。

クリスマスに神戸で開かれた「鳳蘭ディナーショー」に、鳳蘭・ツレちゃんから陳さんご夫妻は招待を受けた。

これには一寸した訳があった。というのは鳳蘭が宝塚歌劇団を退団するという時に、なんと「ツ

レづれ会」というのを数人でつくった。ツレちゃんを囲んで励まそうという会で、そのメンバーの一人に陳さんも名を連ねており、そのメンバーが招かれたのである。

ショーが始まり、やがて舞台は盛り上がり、いつもの様にツレちゃんが舞台から降り、テーブルを回りはじめた。

これは、ツレが得意とする客の膝の上で歌うという趣向で、その第一発目が陳さんの膝の上となった。

以前にも同じ様な事はあったが、その時はシャ



写真、左下部が「花の道」、宝塚市観光協会ホームページより



おとりらん
左は 鳳 蘭

上掲「月報6」より

イな陳さんよりシャイな表情となり唯にこにこしているだけだった。がこの時は違ったのである。ぐっとツレの腰に左手を回わし、右手は肩を抱きしめ、歌う彼女をぐっと見つめる大演技となった。

この時、同じテーブルで出会ったのが、宝塚月組の娘役トップ、こだま愛さんだった。陳さんの印象は、背の高さが合うから良いネだった。

「陳さん、今度月組が映画『哀愁』を舞台化する事になり、こだま愛さんがマイラを演ります。観に行きましょう」と久し振りに誘った。…。

楽屋を訪ねた陳さん、「熱演だったネ」と優しい言葉をかけた。「花が良いかな、多くの色紙にしようか」という暖かい心づかいも陳さんは忘れなかった。後日「欲書花片寄朝雲」という中国の詩を書いた色紙を彼女にプレゼントした。

鳳蘭には力強い「君子豹変」という言葉を使っ

て励まし、優しいショートケーキの様な娘役には「花片」という美しい響きを持った言葉を贈られる陳舜臣さんは、…。